

アムスルだより

No. 54 2002年 3月10日

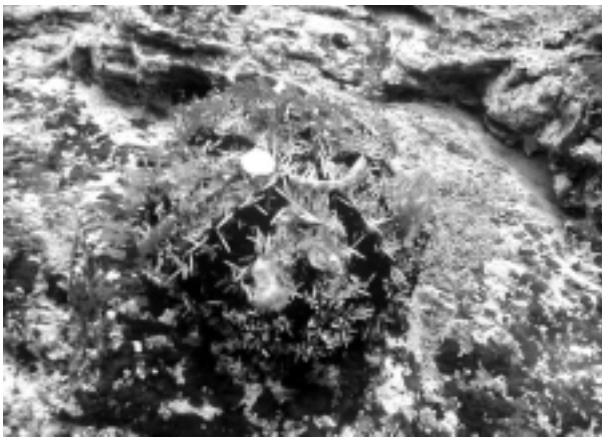
Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



ウニはどうして減ってしまったのか？ シラヒゲウニ

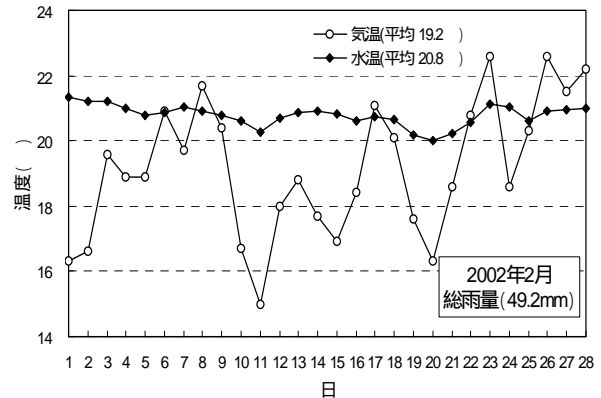
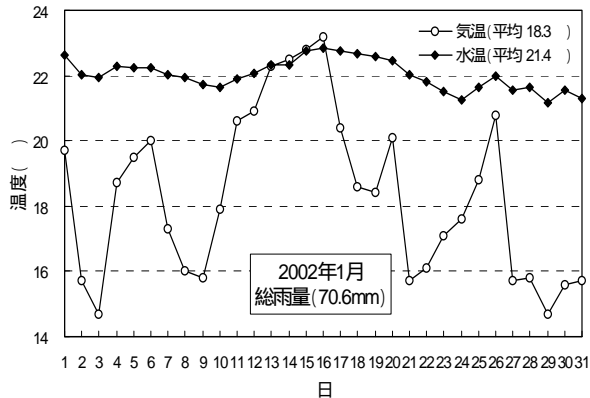
「どうして“ウニ”はいなくなったのか？」村の人たちに時々こういう質問をされます。特に今年になってから、3~4人から同じ質問をされました。とてもむずかしい質問で、いつもはっきりと答えることができないのですが、今回はそのヒントになればよいと思い、“ウニ”についてお話ししようと思います。

ここでいう“ウニ”とは、シラヒゲウニのことです。慶良間の海には、その他にもガンガゼやナガウニ、パイプウニなど30種以上のウニの仲間が住んでいますが、食用にするのはシラヒゲウニだけです。直径10cmにもなる大型のウニで、体の色は濃い紫色のものが多く、短くて白色の棘をもつところからその名前がついたのだらうと思いますが、実際にはオレンジ色や赤紫色の棘をもつものもいます。

先日、サクバルで本当にひさしぶりに

シラヒゲウニを見つけました。最初にも書きましたが、今、このウニはとても少なく、この7年間で20匹くらいしか見ていません。しかも、その内の10匹以上は阿嘉港や新港の中で見つけたものですから、外側の海に少ないのは間違いありません。以前は「歩いたら足にささるくらいいた」と聞きますから、相当たくさんいたのだと思います。では、いつ頃から減ったのでしょうか。島の人に話を聞くと14~15年くらい前にはたくさんいたらしいです。そして研究所ができて間もない頃、今から12~13年くらい前でも、それほど少なくなかったという話も聞きました。しかし、7年前には、もうすっかり少なくなっていました。ですから、この1989~1995年くらいの間には激減してしまっただけで、実は、このウニの減少は、阿嘉島だけの話ではありません。沖縄県のシラヒゲウニの漁獲高(とれた量)を調べてみると、1968~72年が600~1400トンで、1973~75年が1900~2200トンと増加し、けれどもその翌年1976年から激減し1977年以降は200~300トンしかとれていません。今帰仁では1990年には60万匹もとれたのに、それから1995年までは40万匹くらい、そして1997年以降は3~5万匹しかとれなくなっています。時期の違いはありますが、どこでも少なくなっているのです。はっきりしたことはわかりませんが、沖縄県の資料を

定点観測



見ると、「とり過ぎ」が原因のように思えます。ウニは卵などを食用にしますが、1匹のウニは500万~3000万個の卵をもっていると考えられ、その卵をとるということは次の世代のウニを大量にとっているのと同じこととなります。沖縄県では1973~75年にとてもたくさんのウニがとられましたが、そのせいで次の世代が少なくなり、翌年以降の激減につながったのかもしれませんが、けれども、阿嘉島の場合も同じ原因でしょうか。島の人が自分で食べるウニをとるぐらいで、それほど減少を引き起こすとは思えません。別の理由として考えられるのは、エサの不足です。ウニにとってよいエサは海藻や海草で、それらの多いところでは大きく、そしてたくさんの卵をもつウニが育ちます。もしかしたら、慶良間の海では、この植物の量が減ったのかもしれませんが、しかし、残念ながら、それを証明する資料は見つかりませんでした。他にも、「ウニを食べる動物が増えたため」や「ウニの病気が発生したため」などの理由も考えられますが、今のところ、はっきりした理由を挙げることはできません。シラヒゲウニの多い海が、慶良間の自然な姿ならば、もう一度増えて欲しいものです。そのためには、減った原因を明らかにしなければなりません。何か情報をお持ちの方は、ぜひお知らせ下さい。

阿嘉島の海より

- サンゴの移植 -

今、慶留間島の海岸沿いの道路を広げるための工事が行われています。ただ、そのためには海岸を埋め立てなければなりません。でもそうするとそこに生きているサンゴはみんな大きな石やテトラポットの下敷きになって死んでしまうこととなります。サンゴは慶良間で生活する人達にとってとても大事なもので、しかも慶良間のサンゴは世界的にも大変貴重なものです。そこで、埋められてしまう前に一つでも多くのサンゴを助けようと、座間味村漁協、村内のダイビング関係者、阿嘉島臨海研究所が協力して工事現場にあるサンゴを他の場所に移すことにしました。今年の1月14日と16日に20~30人のダイバーが工事現場の海に潜ってサンゴを集め、ニシハマとマジノハマの沖に運びました。そして、水中ポンドやクギを使って一つ一つ丁寧にサンゴを固定していきました。かなり大変な作業でしたが、そのかいあって移植されたサンゴは今でも元気に生きています。これから先もこのサンゴ達が元気に育ってくれるとすばらしいですね。でも本当にすばらしいのは島に住む人達が、自分達の海を守るために力を合わせたことではないでしょうか。